

## 地域交流報告「ありんこ祭り」

地域交流委員 弓術 亮介 講師

今回で7回目の開催となった「ありんこ祭り」は、秋晴れの穏やかな天候のなか、多くの参加者で賑わいました。ボランティアに参加した学生たちは、飲食の出店や喫茶コーナーでの販売、ゲームコーナーでの接客、ストレッチコーナーでの対応などに分かれて、利用者さんと一緒にそれぞれの活動を行いました。学生の中には、初年次体験実習で施設を訪れた学生もあり、利用者さんとの1ヶ月ぶりの再会をとても喜んでいました。このお祭りのボランティアには、近隣の大学生、専門学校生、高校生なども多く参加しており、地域の若者の力が大きな役割を担っていました。今年のお祭りは例年以上に盛会だったようで、施設の職員も利用者さんも非常に喜んでいました。



## 夏期クラブ活動報告 馬術部 東医体 団体総合優勝

医学部 小山 慧明 (春日部共栄高等学校出身)

私は、新入生歓迎期間に馬術部の見学に行きました。そこで先輩方から部活や馬についてたくさんのことを教えていただき、数日通ううちに馬の世話はもちろん、もっと乗ってみたいと思うようになりました。そんななか、6年生の医学部の先輩から東医体に一緒に出ようというもらい入部を決めました。

平日は1年生だけの活動でしたが、馬の世話と騎乗練習は1年全員で協力し合い、先輩の期待に応えたくてより一層練習をしました。週末は先輩方がきて指導してくださり、徐々に馬の状態や騎乗について分かるようになりました。

前期が終わるとすぐに10日間のとても厳しい休み合宿と、富士吉田馬場での初めての大会を経験しました。そして初めての大会から2週間後、無事に東医体に出場することができました。結果としては、わずかではありましたがポイントを勝ち取ることができ、団体総合優勝に貢献することができました。

12月からは馬を北杜市小淵沢町にある乗馬クラブに預け、部員も通いかたちでの活動になります。今年一年の活動を通して馬たちに大きなケガや病気もなく、無事に過ごせたことが一番の収穫です。来年の春は、私が先輩として1年生を迎えることになるので、この感動を伝えたいと思います。



## 夏期クラブ活動報告 卓球部 東医体 シングルス準優勝

医学部 鈴木 智恵香 (秋田高等学校出身)

8月に行われた卓球の東医体で私はシングルス準優勝という成績を収めることができました。応援・アドバイスをしてくださった先輩方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



私は卓球を9年間やっていますが、始めたきっかけは福原愛選手への憧れの気持ちからです。偶然にも東医体期間中、リオオリンピックで福原選手も試合をしていました。どんなに辛くても一息懸命試合をしている彼女の姿に私は感銘を受けました。福原選手を含めた多くの方から私は「自分を支えてくれた人のためにも最後まで必死でやることの大切さ」を学ぶことができました。準優勝に至るまで何度も負けそうな試合がありましたが、この信念を持っていたからこそ乗り越えることができました。

部活動で得られる最大の宝物は仲間だと思います。大学で卓球を通じて新しくできるつながりを大切に楽しく頑張っていこうと思います。

## 夏期クラブ活動報告 水泳部 全歯体 個人メドレー優勝

歯学部 堀田 葉子 (私立三輪田学園高等学校出身)

私は8月に行われた全日本歯科学生総合体育大会水泳競技の200m個人メドレーで優勝しました。その他、フリーリレーとメドレーリレーで3位入賞することができました。

大学での部活は、今まで以上に勉学との両立や限られた時間で効率よく練習することが求められていました。その中で、富士吉田で仲間と協力し積み上げたものが優勝という結果になり嬉しく思います。

今後は、文武両道を実践しながら、複数種目での優勝と大会新記録の樹立を目標に努力していきます。



## スクエアガーデンが完成!

富士吉田教育部学生部長 堀川 浩之 教授

富士吉田校舎で10月24日にスクエアガーデンの竣工式が盛大に行われました。スクエアガーデンは1年生全員(600名)が机とイスで授業をできる広さを持ち、舞台や観覧席も備えた施設です。その他、体育の授業やクラブ活動などさまざまな用途で使用される予定です。

こけら落としとして10月28日から30日まで第56回近代五種全日本選手権の開閉会式およびフェンシングの会場に使用されました。観覧席で多数の本学学生が見守るなか、小出学長が臨席され開会式が厳かに行われたのち、29日に男子、30日に女子のスピーディで目の離せない熱戦が六つのレーン(ピスト)に分かれ繰り広げられました。30日夕からは小口理事長臨席のもと閉会式が行われ、大会が終了しました。



昭和大学  
富士吉田キャンパスだより  
第29号 2016.12.22 発行

発行責任者 富士吉田教育部長 小出良平  
編集責任者 富士吉田教育部広報委員長 倉田知光  
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 4562  
TEL 0555-22-4403

富士吉田教育部 前田昌子 撮影

## 富士吉田校舎図書室のご紹介

富士吉田校舎図書室司書 谷本 典子

窓の外からは、11月の積雪にはしゃぐ学生の声が聞こえてきます。退寮が近づいてくるにつれ、一年は早いものだと入寮当時からを思い返し、感慨深い気持ちになります。

雪どけを迎えた4月、富士吉田校舎図書室と学生との関わりは、授業の一コマを借りて実施される「図書館利用法」からスタートします。図書室での本の探し方をはじめ、OPAC(蔵書検索)の使い方やOPAC以外の情報の探し方などを説明し、実際に図書室に足を運び、一人ひとりに体験してもらいます。時間をかけて説明することで今後の大学生活において図書室を有効に利用してもらえるのではないか、という試みから始まった取り組みは、今年で8年目を迎えます。

各学部の専門科目に加え、人文社会系をはじめとする教養科目も実施されることが富士吉田教育部の特色の一つです。そのため蔵書内容は医療関連の専門書に加え、言語学・社会学・芸術学など、多彩な分野にわたります。また、気軽に利用できる公共図書館や書店が付近にないため、小説なども所蔵しています。楽しい寮生活が送れるようにと各学部の同窓会から寄贈していただいた映画やドラマのDVDも、生活を潤すものの一つとなっています。勉強や息抜きなど、利用者は様々な目的をもって来館されますので、その全てのニーズに応えることを目標として、蔵書のさらなる充実にも努めたいと思います。

50周年を迎えた富士吉田校舎ですが、図書室においては2つの大きな変遷がありました。まずは学生アルバイトによる開館時間の延長の実施で、2005年度より門限間際である21時30分までの開館を実現することができました。また、長らく紙のカードに筆記する貸出方法でしたが、旗の台図書館をはじめとする昭和大学各施設の図書館(室)と共通のシステムを導入することにより、念願のバーコード化・システム化を昨年度に果たすことができました。徐々にではありますが、見直しや改善を重ねていき、利用者さんに「また図書館に行こう」と思ってもらうことが、昭和大学で最初に関わる図書室としての役割の一つだと考えています。

知識はご自身の一生の財産になりますので、2年次以降も各施設の図書館を活用し、多くのことを吸収していただきたいと願っています。

### 広報誌名称について

全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮(男子寮)」「百合寮(女子寮)」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した「白樺・百合」という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごとに成長をとげて前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでくれることへの願いが込められています。

# 初年次体験実習

## 施設実習



医学部 松澤 優実 (市川高等学校出身)

9月の中旬、伊勢原市にある特別養護老人ホーム“らんの里”・“すずらん”で3日間の実習を行いました。認知症をもった利用者さんとお話をしたり、一緒に体を動かしたりしたほか、体温や血圧の測定を行いました。また、「申し送り」というスタッフ同士の情報共有の場に参加させていただきました。

私が実習を通して学んだのは、利用者さんの生活を支える医療従事者としての心構え、そして和やかな雰囲気をつくり、共に楽しむ姿勢です。施設は想像していたより和気あいあいとしていました。初めは緊張で顔がこわばってしまっていた私も、スタッフの方々のように利用者さんの名前を呼んだりレクリエーションをしたりするうちに、自然と笑顔になっていました。気付けば、利用者さんにもこやかな表情をされていました。

一見他愛のない会話をしながら、スタッフの方々には利用者さんの体調の些細な変化に気を配っています。全身の動きや表情から疲れが見られたら、休憩時間を増やすなどの対応をしていました。またお手洗いの回数も細かく記録し、必要に応じて声掛けをしていました。

施設は利用者さんの生活の場です。きちんとした体調管理と穏やかな空間が大切なのだ気付きました。このような学びの場を与えてくださった“らんの里”・“すずらん”の皆さま、昭和大学の教職員の方々に感謝を申し上げます。

薬学部 中村 真奈美 (川越女子高等学校出身)

## 在宅訪問実習

昨年度に引き続き、第2回となった在宅訪問実習。富士吉田地域にお住いの高齢者を訪ねてその方の人生観や人となり、歳をとって困ったことなどをお聞きするというこの実習は、他の実習とは異なる緊張感を持つものでした。

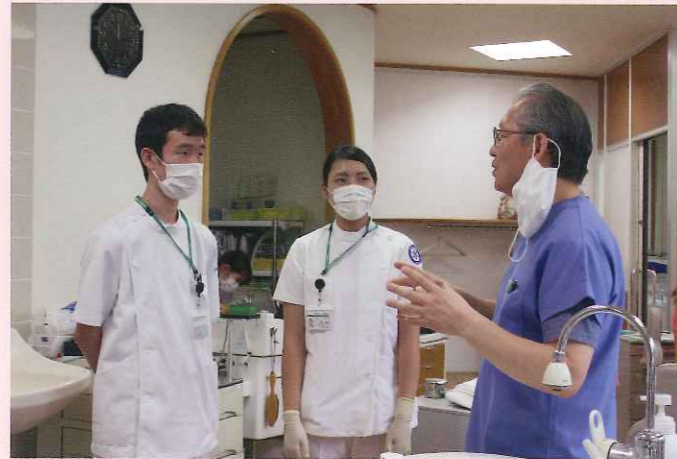
私が伺ったお宅では、ご夫婦そろって私たち学生に应对して下さり、大変楽しい時間を過ごすことができました。富士吉田市の昔の様子や地元の方ならではの富士山への思い、戦後間もなくの苦勞した時代のことなど多岐にわたるお話を伺いました。その中でも、お仕事の話が最も印象的でした。当時富士吉田で盛んだった織物産業を武器に日本のみならず、世界中を飛び回って商売をしていたそうです。終戦後からは苦勞の連続だったが、そのおかげで今の幸せがより大きく感じられる、と仰っていました。苦勞と努力の末に幸福を得た方だという印象が強く残りました。

今回の実習で「Narrativeを傾聴する」ことの大切さを机上の学習だけではなく、実際の経験を通して学ぶことができました。将来医療人として活躍するために、話し方やふるまい方など、相手に不快感を与えないためのコミュニケーション能力をもっと磨く必要もあると感じました。今後の課題も発見することができ、良い実習になったと思います。

最後に、実習にご協力いただいた地域の皆様、ご指導くださいました昭和大学の教職員の方々に御礼申し上げます。



## 病院実習



保健医療学部理学療法学科 海野 絵里香 (関東学院高等学校出身)

今回の病院実習では、患者さんへの心遣いについて学びました。

ある看護師の方が「白衣は時に患者さんに恐怖心を与えてしまう。安心して治療を受けてもらうために、医療行為に対して説明をする必要がある」と教えていただきました。医療者と患者という括りでの診察をするのではなく、説明を間に挟むことによって人と人の対話をもつことができるということです。これは私の目指す理学療法士も同様であると思いました。どのように触診をするか、この動きをすることによってどのような変化がもたらされるのか説明を介すことにより患者は安心してリハビリを受けることができるはず。実際にリハビリ室を見学した際に、声をかけてから動作に移っていました。患者さんに対するちょっとした心遣いによって人と人の治療ができるのだと学びました。

最後に、今回の病院実習は医療人を目指す者として多くの収穫がありました。学んだことを大切に、これから大きく育てていきたいと思えます。ありがとうございました。

歯学部 三野 実幸 (普連土学園高等学校出身)

## 初年次体験実習 (救急法講習・BLS講習)

BLSとは一次救命法のことであり、重要なことは、救命の連鎖・早期除細動です。救命の連鎖は、心停止の予防・早期認識と通報・一次救命処置・二次救命処置の4つの鎖から成り立っています。心停止の予防は初期症状に気づき、救急車を要請することであり、早期認識と通報は心肺停止を疑い、119番通報とAEDの持参です。一次救命処置は、AEDを使用して胸骨圧迫と人工呼吸による心肺蘇生を行うこと、そして、二次救命処置は、傷病者の心拍が再開した場合に、専門家による集中治療を行うことです。

今回の実習では、一次救命処置を実践しました。私は高校生のときに救命救急の講習を学校で受けていたので、そのときのテキストを見直して予習してから今回の実習に臨むことができました。胸骨圧迫30回のあと、すみやかに人工呼吸を行うことが難しいと感じましたが、実際は一刻を争うもの。医療人として傷病者のために常に素早く行動することが、何よりも大切だと痛感しました。





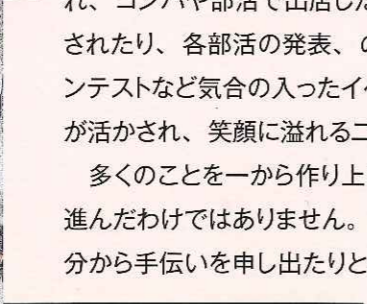
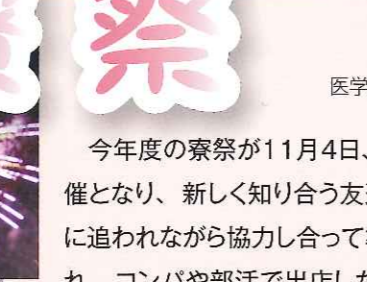
# 寮祭

医学部 福羅 怜奈 (白百合学園高等学校出身)

今年度の寮祭が11月4日、5日に開催されました。今年は秋の開催となり、新しく知り合う友達や、前期で仲を深めた友達と、時間に追われながら協力し合って準備を進めました。当日は天気にも恵まれ、コンパや部活で出店した模擬店では美味しそうな食べ物が販売されたり、各部活の発表、のど自慢大会、お笑い、ミスミスターコンテストなど気合の入ったイベントが催されたりと、それぞれの個性が活かされ、笑顔に溢れる二日間になったように思います。

多くのことを一から作り上げた今年度の寮祭では、全てが円滑に進んだわけではありません。誰かがそっと手伝ってくれたり、逆に自分から手伝いを申し出たりと、「チームワーク」なしにはこうして無事に終えることができませんでした。

最後に、寮祭を盛り上げてくれたスタッフや寮生に感謝と述べると共に、準備期間や当日の楽しい思い出が、かけがえのないものになったことを願っています。

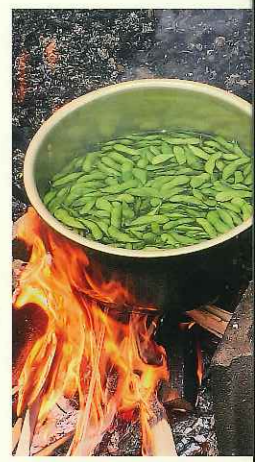


## 収穫祭・Jack-o'-Lantern 作りについて

歯学部 岩田 理沙 (日本大学豊山女子高等学校出身)

10月末に昭和大学自然教育園で行われた収穫祭では、さつまいも・じゃがいも・オクラ・枝豆・キャベツなど様々な種類の野菜を収穫しました。幼稚園以来の体験で、気づいたら当時のように夢中になって掘っていました。最近、自然と触れ合う機会が減っているので、収穫祭を通して、自然や大地の恵みへの感謝の気持ちを改めて感じることができました。収穫した野菜は、寮に持ち帰って美味しく頂きました。

また、毎年ハロウィンに合わせて育てているカボチャを使用したランタン作りは、貴重な体験でした。難しそうなイメージがありましたが、先生が丁寧にやり方を教えてくださったので、楽しみながら作成することができました。ランタンを作成することで、より一層ハロウィン気分を味わうことができました。



## 国際交流 ポートランド州立大学サマープログラム

薬学部 廣瀬 瑠記 (私立森村学園高等部高等学校出身)

この国際交流プログラムは三週間をアメリカのオレゴン州で過ごすことになります。家族旅行以外で海外に行ったのは初めてでした。英語での会話に慣れていないため、普段の会話のように自分の考えを伝えることができずもどかしい思いをしました。なんとか相手に自分の気持ちを伝えられたときの喜びはかけがえのないものでした。自分の気持ちが伝わったのは相手に言葉を受け取る準備があったからです。今後は自分が誰かの言葉を受け取る準備をしなくてはならないと感じました。

また、私たちは医療施設の見学にも行きました。特に印象的だったのは練習として患者さんの代わりに使うマネキンです。マネキンは精巧にできていて、話したり脈を測ったりすることもできました。この実習を自分の経験として活かすことができるようになるにはたくさんの知識が必要なのだろうと感じました。

将来、自分に必要とされていることは何か、と考えさせられた研修でした。



大学では学生の国際交流を推進するため、海外実習・研修補助制度を設けて積極的に支援しています。